

加賀藩八家の先祖観

— 『三州奇談』と横山家家譜 —

大 塚 有 将

はじめに

本稿の目的は、加賀藩八家・横山家を事例に、近世武家社会における先祖観・由緒の形成と展開を明らかにすることにある。

近世日本の藩研究では、比較的史料がまとまって残存している雄藩を中心に、職制や家臣団構成、政治や経済のみならず、文化や思想にいたるまで多様な視点からその様相が解明されてきた^①。とはいえ、近世大名や上層武士をはじめとする武家の「家」に関する研究は、二一世紀に入って本格化し、未だ緒に着いたばかりといえるだろう^②。加賀藩においても、加賀藩研究ネットワークや金沢城調査研究所を中心に金沢の町人・職人・商人や領国内の十村や富裕層など、さまざまな身分階層がとりあげられ、より豊か

な藩政期の実態が明らかになりつつある^③。それでも、加賀藩における武家社会に関する成果は、近世前期を中心に数えるほどといつていい^④。

他方、近世は「由緒の時代」といわれる^⑤。一九九〇年代以降、一八世紀後半から一九世紀にかけての村の由緒をめぐる研究が進展した。この時期にさかんに喧伝された村の由緒とは、戦国期から近世初期までの先祖たちの武功や戦国武将との関係を主張するものが多くみられるという。また、武家社会においても、家譜制作や藩祖の顕彰などが行われ、戦国期における活躍や祖先の足跡を礼賛する傾向がみられるようになるといわれている^⑥。しかし、家臣層を対象にした先祖観の研究は、きわめて少ないのが現状である。

本稿は、武家社会の研究と由緒論の交差点に位置づけら

れる。

近世加賀藩前田家では、「加賀八家」とよばれる年寄家が藩政の中心を担ってきた。加賀八家は元禄期以降に確立し、当主たちは大名と同規模の領地を所有し、時には幕府から一目置かれる存在であった。八家に名を連ねたのは、本多家・長家・横山家・前田長種家・前田直之家・奥村宗家・奥村支家・村井家であった。本論文では、このうち横山家を取りあげることにしたい⁽⁷⁾。

総じて加賀八家に名を連ねる家は、前田利家の尾張時代からの譜代の家臣（奥村宗家・奥村支家・村井家・前田両家）であったり、江戸幕府との関係あるいは領国内に強い地盤をもつという強みがある（本多家・長家）場合が多い。ところが、横山家は、初代長隆がすでに越前府中を領する大名となっていた前田利家に奉公し、そのわずか一年後には賤ヶ岳合戦で戦没している。仕え始めた時期の遅さや政治的地盤の脆弱さをみると、他家に比べて八家としての条件を満たしていないようにみえる。にもかかわらず、歴代藩主から厚い信頼を獲得し、幕末まで藩内で枢要な位置を占め続けたことは、きわめて特殊な事情によるものだといわざるをえない。

また世襲を原則として加賀藩の執政を司ってきた加賀八

家だが、時に血縁の断絶の危機に直面し、養子による家の存続に奔走していた。養子を迎えることは、初代からの血縁が途切れ、それまでの家の歴史が変容するリスクを内包しながらも、家の系譜を再確認し、由緒が未来に託される重要なターニングポイントともなりえたと考えられる。

横山家は、どのように自家の由緒を創出し、八家としての家譜の正統性を説明してきたのだろうか。本稿では、一八世紀初頭に養子として迎えられた横山貴林に焦点を当てることで、横山家の先祖観の醸成の様子を読み取ってみることにしたい⁽⁸⁾。

まずは、貴林の逸話を記した『三州奇談』『和光不二』の読み解きからはじめることにしよう。

第一章 『三州奇談』を読む

一、「和光不二」を読む

『三州奇談』は、一八世紀後半ころ堀麦水によつて書かれた加賀・能登・越中の三州についての奇談集である⁽⁹⁾。巻四「和光不二」は、三つのエピソードから構成されている。一段目は、長家の氏寺である武頭麗社を訪れたある侍が、神像を見たいがために小僧の制止を聞かず祠を開けよ

うとし、吹き飛ばされる。二段目は、ある神道者が宝物の調査を願い出て佐那武の社に入ろうとするが、二度も目がくらんでしまい、入ることすら叶わなかったという。三段目は、原文を紹介しよう。

然るに延享三年の秋、加州太夫・横山和州公、武州の帰路に信州戸隠山へ詣給ふに、法印の坊に案内して、拝殿に於て、「此信州戸隠山と申は、往昔天の岩戸を引明給ひし手力雄の神にして、扶桑鎮座の荒神也。昔は此山上に鬼住し也。去ば嶺頭には、九頭竜権現靈験いちじるしく、荒神にて渡らせ給ふ。是より法施して山下有べし」と云に、横山氏「奥の院詣ん」と有しに法印大きにとどめて、「此奥院と申は住持さへ一生に只一度百日齋戒して上り得る事也。是さへ多くはあやまち有。自余の人上る時は、忽山鳴崩、怪象有事疑なし。更に叶はざる事に候」と云を、大和守聞ぬ顔して登らんとするに、法印袖にすがり押留るを、振放し一さんに山上へ登られしに、平手武太夫と云小姓一人付添ふてのぼりける。法印周章肝をつぶし、「古来より此山上へ登りしためし曾てなし。ひらに留り給へ」と跡より追付追付制されしに、「何ぞ神に詣で其奥院を望まで帰

る事有べき」とて、五十丁を一走到りて頂上の所迄往れける。山上は堂宇もなく、まして仏像らしき物も非ず、長三尺斗の巖石三ツ並びたりしのみ也。法印もせん方なく、振ひ振ひ続き来つて、「則其三ツの石社、御神体也」と、うやうや敷申ければ、和州公一笑して、「此石を明神とは扱々聞へぬ事共也。夫々ふめふめ」と仰ければ、小姓平手武太夫畏つて、わらんちながら散々に踏けるこそ心ちよけれとて、主従山下して坊に入、食膳など認め給ひけるに、法印は只あきれ、「去にても加州にては姓名をば誰とか申候や」と問れしに、「横山大和守」と名乗りて、参詣の法施として、毎年米十俵充可令寄付の条を仰て帰給ふ。法印再び肝をつぶしぬ。夫より春ごとに札を捧げて、金沢へ来つて祈禱所とは成ぬ。一はおどして一を伏し、一つは和らひて志を助く。いずれか結縁の妙用ならん。深く味ふべき事にこそ。

延享三年（一七四六）の秋、「加州太夫横山和州公」なる人物が、武蔵国から加賀へ帰る帰路に信濃国戸隠山へ参詣した⁽¹⁰⁾。横山和州は、戸隠山の奥院へ参詣したいと法印の坊に伝えたが、荒神の靈験が凄まじいことを理由に参詣

は困難だとして、下山を勧められる。和州は、その制止を振りきって供の小姓を一人連れて山頂にたどりつき、長さ一メートルほどの三つの巖石を前にする。それが御神体であると告げられると、横山和州は笑いながら、供の平手武太夫に御神体を踏みしだかせた。下山した後には「横山大和守」と名乗り、参詣の布施として毎年米一〇俵を寄付することを約束して、金沢へと去って行った。

この三段目の奇談は、一、二段目に対して、異なる特徴が三点ある。

第一に長文なことである。三段目は全体の四分の三を占めている。第二に、具体的な登場人物の名前が明記されている。「侍」や「神道者」といった一般名詞が登場する一、二段とちがって、三段目では「横山和州」と「平手武太夫」という固有名が登場する。第三に、神による罰がない。一、二段では聖域を侵そうとする者に対して、罰や警告を与える逸話である点で共通している。ところが、三段目では、戸隠山の神である手力雄神と九頭竜権現がいずれも「荒神」として強い靈験を強調され、御神体を踏むという無法を犯すが、靈験は発現しないままである。一、二段目で神罰を受けた主人公とは異なり、戸隠を信仰する態度と、神仏に對してとりうる理想の姿勢として「横山和州」の存在は示

されたものととらえられるだろう。

二、横山大和守貴林

「横山和州」とはだれだろうか。

まず、「加州太夫」と「横山」から、加賀藩年寄の横山家の縁者が想定される。横山家は、加賀藩の年寄家のひとつで、三万石を有し、一三代にわたって前田家に仕えた一族である。「平手武太夫」も横山家に仕えてきた平手家の子孫と考えていい⁽¹¹⁾。

次に注目されるのは、「和州」、すなわち「大和守」という官途名である⁽¹²⁾。横山家の当主は、藩政初期の横山長知以来、代々「山城守」を名乗ってきた⁽¹³⁾。ただし、横山家の歴代当主のなかにただひとり「大和守」を名乗った人物が存在する。七代横山大和守貴林（一六九五―一七四八）である。『三州奇談』が語る戸隠山参詣は延享三年（一七四六）のことと記されていることから、横山貴林の活躍期とも合致する。

横山大和守貴林は、元禄八年（一六九五）に同じ加賀八家のひとつである奥村支家に生まれた。宝永元年（一七〇五）、一〇歳で横山家に養子入りして家督を相続し、知行三

万石を拝領した。正徳三年（一七一三）には人持組頭となり、藩政の中心である年寄中席に詰めた⁽¹⁴⁾。さらに同年、御用方加判、月番に任命される。享保一五年（一七三〇）当分御城方御用となり、横山家当主としては数少ない金沢城代を務めている⁽¹⁵⁾。のちには、本多政昌との二枚看板で藩政を支え続けた⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。貴林は、寛延元年（一七四八）に五三歳で他界するまでの四三年間、約半世紀にわたって横山家の当主としての責務を全うしている。

また貴林には、男子六人、女子一〇人もの数多くの子女がいた（系図参照）。このうち五人は早世したため、男子は三人で、女子は藩政の中樞を担う本多家や有力な藩士に嫁ぎ、婚姻関係を結んだ⁽¹⁸⁾。一八世紀初頭までの横山家は、貴林を末期養子に迎えるほどに断絶の危機にあつたが、貴林以降は断絶することなく幕末を迎える。

八家横山家当主としての貴林の働きは、横山家の先祖たちに優るとも劣らないものだった。

ただし、貴林は、横山家当主が世襲してきた「山城守」を名乗ることを許されなかった。『松雲公御夜話』によれば、享保九年に貴林が諸大夫に任じられたとき、「山城守は代々家の名に候へども、差合ひ候に付、年寄中僉議にて、（中略）五畿内にて山城・大和と続き申す儀に候へば、山城は成り

難く候とも、せめて大和守になり然るべき（山城は代々の名であるが、養子なので差し障りがある。年寄中の詮議でせめて山城の隣国にあたる大和であればよいこととなった）」という。奥村恵輝の三男として生まれ、六代横山任風の末期養子として家督を相続した直系でない貴林が、横山家当主たる「山城守」を名乗ることはできなかったのである。

横山家の当主として務めを果たし、新しい横山の血統を打ち立てた貴林にとつて、自身が横山家の直系でない養子であることは、もどかしさを感じるものだったかもしれない。

三、貴林の寄り道

『三州奇談』によれば、横山和州が武蔵国から信濃国戸隠山に参詣したのは、延享三年のことであつた。当時の横山貴林の動きを追ってみることにしよう。

延享二年（一七四五）六月一二日、加賀六代藩主の前田吉徳が逝去した。嫡男の前田宗辰は、江戸藩邸で父の訃報を知り、幕府から家督相続の許しをえるため、急遽、重臣たちを招集した⁽¹⁹⁾。

横山貴林も、慌ただしく金沢を出立し、新藩主とともに

横山家

①横山長隆

長秀

②長知

長忠

常隆

次女

三女

長女

康玄

興知

長治

兼知

守知

雅知

定治

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

和忠

①奥村易英

奥村支家

③忠次

康次

女子

長女

龜松(早世)

④玄位

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

⑥貴林

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

長世

⑦隆達

某(早世)

某(早世)

隆振

某隆明

富

園

庫

順

忠

全

廉

延

慶

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子</

江戸城で將軍徳川吉宗に謁見した。將軍吉宗に謁見した宗辰は、ついで江戸に滞在していた二条家に拜謁し、盃を賜った⁽²⁰⁾。幕府のみならず、縁のあった公家の二条家からも承認されることで、前田家の家督相続と新当主としての立場を確かなものにしたといえる⁽²¹⁾。その様子は、『家譜』(横山大膳隆從 天明五年(一七八五)六月)や『家譜』(横山求馬 文政六年(一八二三)、『横山隆平先祖以來事蹟書』『先祖由緒一類附帳』(明治三年(一八七〇)一月横山隆平)など、横山家家譜類の多くに記されている。前田吉徳は、二〇年以上にわたって加賀藩主として君臨した貴林の主君であり、貴林を金沢城代に抜擢した人物であった。藩主の死、新藩主の誕生という政治的画期のなかで、貴林は江戸で奔走し続けていたのである。

延享二年の横山貴林の江戸在府は一年近く続き、翌延享三年四月に帰国の許しをえたことで終わりを迎える。『三州奇談』の逸話は、延享三年四月の貴林の江戸からの帰国の道中であつた。

この貴林の帰国について記す史料はきわめて少ない。とはいえ、わずかにその経緯を伝える史料に、文政六年に一代横山隆章によって編纂された『家譜』がある⁽²²⁾。これによれば、「同(延享)三年四月御国許江之御暇被下罷帰

候刻、江州中郷吉祥庵江立寄、先祖長隆之廟所江参詣仕度之段、大應院様江奉願、木曾路通り罷帰申候」とある。この史料から、貴林の帰国ルートは「木曾路を通った」ことがわかる。

加賀藩が参勤交代で使う経路は、富山・信濃追分などの北国下街道を経由し、中山道に入るルートが多用された⁽²³⁾。距離も短く、行路の四分の一を自国領内で安価に済ますことができるからである。中山道を経由するルートは、特別な理由がなければ、選択しない経路なのだ。では、「臺に詣でる」とは、どこへ参詣したのでろうか。

江戸での仕事を終えた貴林は、藩主となつてはじめて金沢の地を踏む宗辰のメモリアルな行列への供奉を辞し、木曾路を経由する別行動を申し出ていた。その理由は、横山家の始祖長隆が眠る近江中ノ郷村吉祥庵に参詣するためであつた。

延享三年に江戸から金沢へ向かう途中で戸隠山に立ち寄る可能性は低い。横山貴林が寄り道したのは、吉祥庵という湖北の寺院だったのである⁽²⁴⁾。

第二章 吉祥庵と横山貴林

一、江州中ノ郷吉祥庵

延享三年（一七四六）に横山貴林が立ち寄ったのは、『三州奇談』がいう戸隠山ではなく、『家譜』が記す吉祥庵という寺院であった。吉祥庵とは、どのような寺院なのだろうか。吉祥庵には、横山家の歴史を物語る貴重な文書が伝えられていた。この吉祥庵で発見された史料をもとに、当時の吉祥庵と横山家の関係を紐解いていきたい⁽²⁵⁾。

吉祥庵は、現在の滋賀県長浜市余呉町にある曹洞宗寺院である。吉祥庵（今の吉祥院）は、応永十三年（一四〇六）に創建された天台宗の寺院であった。文明十八年（一四八六）に同じ余呉町にある洞寿院の末寺となったことで、曹洞宗寺院となった。吉祥庵と関係の深い一族に、戦国期浅井氏の家臣で、のちに儒学者で対馬藩通交実務者として知られる雨森芳州を輩出した雨森氏がいる。吉祥庵の隣町、長浜市高月町雨森は、雨森氏祖先の発祥の地で、屋敷の寄進等が確認できる。

他方、吉祥庵は横山家とも無関係ではない。横山家の祖先は、長浜市高月町横山を発祥とする説がある⁽²⁶⁾。また、吉祥庵には、横山家初代当主である長隆の墓がある。横山家の当主は代々、金沢市野田山墓地に埋葬されてきた⁽²⁷⁾。しかし、天正一〇年（一五八二）の賤ヶ岳合戦で討死した

長隆だけは、戦場にほど近い吉祥庵に葬られている。横山家にとつて、吉祥庵は始祖長隆の廟所であった。吉祥庵と横山家との関係は、いつからみられるのだろうか。【史料一】をみてみよう。

【史料一】⁽²⁸⁾

今度御改二付、吉祥庵之次第之事

一、享保十一年^{午 丙}ノ四月、從江戸御寺社方惣而本朝之寺社人数御改二付而、今度二条方當国二而も、郡割二被成、伊香郡并高嶋此二郡御改之御廻状参候二付、當村吉祥庵義、自先年終ケ様之節、書上ケ不申候由二而、任先例、右件之通除申之旨、（中略）

一、①此吉祥庵と申寺者、上古者天台宗二而叡山之末寺二而御座候処、夫故二哉、文明十八年^{午 丙}之年二至而、洞寿院末寺二成候、夫方當享保十一年^{午 丙}ノ年迄、凡二百四拾壹年二罷成候、（中略）

一、毎年切死丹御改之時分も、吉祥庵義菅並村洞寿院五十餘ヶ寺之末寺之内十七ヶ寺者、井伊掃部頭様へ一本紙二乗候而被指出候、此趣を以相考候へハ、先年者彦根御領与相見候へ共、いつ之比方付落申候哉、當役人共も、曾而不在候故引請不申候、但、②柴田合戦之節、

此辺長濱方柳瀬迄六里之際御焼拂、寺社共ニ退転仕候、

(中略)

一、◎吉祥庵之義、先年方雨森之家方自庵之様ニ申来候、併今度之僉議ニ付、洞寿院之末寺ニ成候年数當午ノ年迄二百四拾壹年ニおよび申候、扱又雨森氏之先祖中鄉村之住人と申者、六代以前雨森因幡方則、天正之比之人ニ而漸百餘年ニならてハ成不申□□、定而此因幡富貴たる之由及承候、其節吉祥庵退破仕候所、被取立候屋敷田畑杯被致寄進事有之候故となへ失ひ、自庵之様ニ申来候と相聞申候、証文迎も無之候へハ、分明成事難弁候、雨森家筋ハ代々掃部頭様御領分、夫故先年者彦根組ニ而候哉、毎年宗門御改之節、彦根へ洞寿院之一本紙ニ乗候而被指出候故、為後日覺書如件
享保十一年 江州伊香郡中鄉村
菅並洞寿院末寺

丙午四月吉日

吉祥庵 覺暮

【史料一】は、享保十一年（一七二六）に吉祥庵が江戸寺社奉行方に送った由緒書である。①より、吉祥庵がもとは天台宗寺院で、文明一八年に曹洞宗洞寿院の末寺に加わったとされる。加えて、二四一年の歴史をもつ寺院であ

ると記述されている。

また①から、賤ヶ岳合戦のときに辺り一帯が焼き払われ、吉祥庵でも建物の焼失のみならず、所蔵する文書類が失われてしまったという。古い由緒を主張しながら、その証拠となる文書がないことを申請の遅延の理由として弁解している。

加えて、◎雨森氏の先祖で、天正年間ころに中ノ郷村の住人であつた雨森因幡以来、雨森家の助縁をえてきたことが記されている。

注目すべきは、享保十一年の吉祥庵の由緒書には、横山家について一切語られていないことである。賤ヶ岳合戦で堂舎が焼き討ちされたと記しながら、この合戦で討死し、吉祥庵に葬られた長隆の名前も一切登場しない。どうやら享保十一年の段階では、吉祥庵にとって横山家はさほど重要ではなかったらしい。

管見のかぎり、吉祥庵に残る史料のなかで横山家との関係を示す最初なのは、横山貴林が造立した墓碑である。貴林がこの墓碑を造立したのは、吉祥庵由緒書が書かれてからわずか七年後の享保一八年のことであつた。

二、享保一八年の墓碑建立

吉祥庵の裏山に横山長隆の墓碑がある（29）。杉林に囲まれた平地に鞘堂に納められた柱状型の墓碑が立つ。墓碑の正面には「故横山半喜府君之墓」と刻まれており、残る三面にわたってびっしりと碑文が刻まれている。やや長い、全文を掲載しよう。

【史料二】（30）

①蓋聞世、有非常之君而後有非常之臣、我前田公之肇基於北陸三州也、横山氏輔佐之功不為少多矣、所謂非常之臣者有焉、横山氏姓小野譜系出身敏達帝中葉武藏守義隆住江州横山遂以為氏、②府君諱長隆字清三郎称半喜、天文八年己亥某月某日生、於其采地濃州室原邑後遷同州多藝郡直江莊、天正十年壬午赴越前州府中而、同次子長知事贈重相公、長知時十五歳、府君為人忠直剛毅故、公礼遇日加国政軍事莫不與焉、③十一年癸未夏四月二十一日、豐相国與柴田勝家戰于江北柳瀬、府君與長知從公張陣、於一面府君為掌旗、我軍不利於是、府君嚴建旌鼓而、勇氣不撓敵兵為之辟易不進少焉、敵察我兵不多爭前急擊、府君把槍苦戰立殺數人被創而死、年四十五、遂葬于江州中郷吉祥庵丘口庵隸同州管並同寿院、府君歿称長隆院殿松山峰祝居士、④府君娶杉氏有子四男三女、伯曰長秀、

仲曰長知、曰長忠、季曰常隆、長女適奥村易英、次女適家僕齊藤好直、季女適家僕伊藤宗喜、長秀初為濃州丸毛不臣養子後、來加州松任事、贈重相公越中州鳥越之役先登接槍爾後処々有戰功、賜祿九千餘石、有命属黃門公之加州小松後処守大聖寺城、明年病卒、無子以弟長知三子長治為嗣世々蔭襲、長知為人聰敏不凡、七歳入丹州永谷山圓通禪寺而字讀書、十五歳辞業來越前事、②贈重相公父戰死之時独殿衆軍短兵急接反擊數次斬其驍騎、贈重相公親視屢称其勇遂為府君家督、是為第二世後能州末森越中鳥越、豐前嚴石、野州松枝、武州八王子、及摂州大阪之役功績甚多數、累加秩領三万石屢奉謁神祖台廟賞長知功賜黒印御書時有獻則有賜會徽、次子與知於幕府長知為朝散大夫州刺史歴仕贈重相公、黃門公、次将公、宰相公四世執国政功名聞于四方、正保三年丙戌春正月二十一日病卒金沢私第、享年七十九、長知從兄長忠於関左之役処々立戰功後事、贈重相公公之攻山口宗永也、長忠先登於大聖寺城金丸而戰死、不幸無嗣、常隆亦多武功事、贈重相公賜二千八百石伝家至今、④長知娶前田氏長種之女、有子八男八女、長曰康玄事、贈重相公大阪夏冬陣從黃門公為第二陣隊長娶今枝氏直恒女、康玄先父卒故継家、次曰與知事、台廟從大阪兩度之役、次曰長治事、贈重相公

從大阪兩度之役、次曰定知皆事、宰相公長女適玉井貞清、

次為貞清繼室、繼適山崎長鏡、繼適三輪一信、次適不破

由昌、次適成田通渡、次適水野重成、季適家僕平手言頼、

⑤康玄生忠次以長知嫡孫而承祖家、是為第三世、娶日置

氏備前侯国老日置某女也、忠次生四男二女、伯曰龜松天、

仲曰玄位、叔曰任風、季曰忠通天、⑥玄位継家は為第四

世、娶奥村氏庸礼之女、玄位早卒無子故任風繼之、是為

第五世階朝散大夫任山州刺史娶横山氏定治女忠次二女、

長適奥村榮尚、次適奥村履虎、任風無男子以其女婿貴林

為嗣、⑦貴林実奥村惠輝之子也、為朝散大夫加州刺史是

為第六世、任風生三女、伯適奥村有輝、仲適富田方巢、

叔即貴林室也、⑧貴林嫡子曰長世、夫自府君效死以来一

百五十有一年矣、瓜瓞綿々為十餘房、安富尊榮各克其家

皆府君之遺沢也、於戲奇矣盛哉、此其裔孫之所以□石勤

文永世不忘而子之榮道甚美也、系之以銘、

銘曰 北方大藩 加口能越 強首群国 英声煥發 百五十

歲 国伝胎厥 世臣祖先 自敏達始 小野其姓 横山其氏

桓々半喜 勇武孰比 江北一戰 掌我旌旆 身葬中郷 名

留柳瀬 苗裔閥閥 橘梓殿最 流芳千祀 景福無圻 吉祥

丘木 參天撐雲 磨鏤玄石 云刊斯文
享保十八年歲次癸丑孟夏二十有一日

六世孫賀藩国老朝散大夫和州刺史小野貴林

同建

男 監物長世

⑧より、この石碑は、享保一八年四月二一日に、横山貴林・長世父子によつて建てられたものとわかる。碑文の大半を占めているのは、横山家の初代当主長隆から、貴林の嫡男長世までの七世代にわたる横山家の歴史であつた。①では、横山家の加賀藩における地位と長隆以前の由緒について書かれている。②では、長隆の壮絶な生涯が刻まれている。③は長隆の子息に関して、特に二代目当主の長知の記述が詳しくなされている。④は長知の子息の婚姻関係について述べている。長男の康玄は、父の長知より先立つたために家督相続せず、みずからの嫡男である忠次に嫡孫承祖されている。⑦で貴林の出自について簡単に言及したのち、⑧で享保一八年は長隆没後一五〇年目にあたり、長隆の顕彰と子孫繁栄を祈念するためにこの石碑を造立したと記されている。

碑文の特徴は、大きく四点あげられる。

第一に、横山家が小野姓横山党に発し、近江横山に住した一族であるという出自が明記され、北陸三州の礎を築い

た前田家の優れた家臣であること①が喧伝されている。

特に、二代目当主長知とその兄長秀という第二世代に関する記述が、他の世代と比べて濃密である(③ 系図参照)。これは、横山家が加賀藩前田家に仕え始めた時期であることや賤ヶ岳合戦と大坂の陣での活躍が重要視されたためと考えられる(③④)⁽³¹⁾。他方、作者である貴林自身の記述は少ないが、子息長世の名前までを石碑に刻んでいるのは、貴林の系譜が永く横山家として続いてゆくことを示唆しようとしたものともいえるだろう。

第三に記述の多くが武功に偏っている。武士社会では、関ヶ原合戦から一〇〇年あまりを経て、徳川の泰平が続くなかで、先祖の武功を再確認する風潮が広がっていた³²。横山家の碑文も例外ではなく、先祖の武功をもつて加賀藩における横山家の社会的地位を説明する意図をもっていたとみられる。その最たるものが、二代目当主の長知に関する記述であった。長知が幼くして学問を修めたことが語ら

れ、賤ヶ岳合戦での奮戦にはじまり、末森城合戦や鳥越合戦、九州征伐や熾烈をきわめた八王子城の攻防でも戦列に加わり、大きな戦功をあげてきたこと③が三万石という大身に出世しえた根拠となっている³³。

第四に、貴林にいたる七世代の男子だけでなく、子女の嫁ぎ先も併記されている。歴代当主の功績を称えるだけでなく、子女の婚姻関係を明示することは、横山家の家格を示すのに有効であつた。横山家は、加賀藩のなかで前田家の血縁者でも、譜代の家臣でもない。横山家が加賀藩のなかで生き残るためには、有力な一族との婚姻関係や養子縁組が重要な由緒であり(③④⑤⑥⑦)、家の正当化につながるものだったことがうかがえる(34)。

横山家と、貴林の出自である奥村支家を併記した系図をみてみよう。貴林が横山家の継嗣となる以前から、奥村支家と横山家とが深い結びつきをもっていたことがわかる。たとえば、貴林の叔母は四代目当主・横山玄位の妻であり(⑥)、奥村支家の当主奥村易英の妻は横山長隆の娘である(③)。横山家の女性たちがつないできた横山家の血は、奥村支家と横山家との間で数度にわたって血の交換をくり返した結果であり、横山貴林の家督相続とはこうした両家の歴史の流れのなかで正当化されたのである(35)。

以上のように、吉祥庵碑文とは、長隆の墓碑であるとともに、横山貴林にいたる横山家七代の家譜だったのである。

なぜ貴林は吉祥庵に墓碑を造立したのであるか。その手がかりとなるのが、墓碑建立の享保一八年が長隆の没後一五〇年目にあたるという事実である。長隆が討死したのは、天正一一年（一五八三）三月の賤ヶ岳合戦においてであった。貴林は、一五〇回忌という節目の年を意識して、始祖である長隆の顕彰のために石碑造立を行ったのである。

後述するように、実は同じ年、横山貴林はじめて横山家の家譜を作成している。貴林の家譜編纂事業は、事前調査をふくめれば遅くとも数年前からはじまっていたはずである。貴林は、加賀藩に仕官して一五〇年目を迎えるのを記念して家譜編纂を命じ、横山家の由緒を紐解き、過去の記録を整理するうちに、吉祥庵の存在を再発見したのではなかろうか。

横山貴林は、長隆の一五〇年忌に合わせるように、吉祥庵に墓碑建立を計画した。碑文には、編纂していた家譜の文章を刻むことで、横山家の歴史の正当性や永続を願う意図があったと考えられる。そこには、横山家当主としての義務感や、自身が末期養子として家督を継いだ経験からくる血縁が途絶えることへの恐れも影響していたと推測され

る。吉祥庵墓碑は、長隆の顕彰と同時に、貴林が横山家当主であることの証でもあったのだろう。

三、延享四年の堂舎再建

墓碑造立をきっかけに、横山貴林と吉祥庵との関係は接近していったようである。

たとえば、吉祥庵に伝えられた年未詳正月二二日付「横山貴林書状」によれば、貴林の年賀に対して二日前に届いた返札を謝すとともに、吉祥庵住持の息災を喜ぶ内容が添えられている³⁶。吉祥庵と貴林との親しい関係がうかがわれ、同様のやりとりは毎年のように続けられていたものと思われる。

貴林が吉祥庵に参詣したのは、墓碑建立から一三年後のことであつた。その翌年の延享四年（一七四七）九月に吉祥庵住持徹音から貴林に宛てて書かれた書状が残っている。

【史料三】³⁷

乍恐奉願上候口上之覚

一、拙庵儀、殊之外大破候故、近年建立之志願有之候得共、小檀家殊二何れも不勝手之族相談も難決見合罷在候得共、去年五月、殿様御廟参之砌、暫御安座被成下、

御賢覧之通見苦敷事ニ御座候、殿様御先祖御位牌も奉安置候所、近頃以不實々躰与被為思召儀其千万氣之毒ニ奉存候、此度造営思立材木根切等も致掛候、畢竟此筋ニ而者殿様御菩提所与世上一統申馴候得者、龜相之小庵ニ而も難為置見聞、相應之建立ニも仕度奉存候、依二近頃御世話之事ニ御座候得共、寺之絵図等被仰付被為下候ハ、来年中ニ建立仕度奉存候、尤本寺方も被申附候之御位牌御厨子迄も被仰付而殿様御腰被為懸候得者、只今迄二者格別之位階急々普請取企申様ニも被申付、旁以此度建立之一件御窺申上候、宜敷被仰付被下候者、来春方普請相企申度奉存候、以上、

江州伊香郡中ノ郷村

延享四年

吉祥庵

卯九月

徹音

印

横山大和守様 御役人中（後略）

このごろ吉祥庵の堂舎は大破し、再建の思いはあつても、小檀家たちに相談してもいっこうにはかどらない状態であつた。前年五月に貴林が参詣に訪れたときも、安置してある横山家の位牌も実態のない気の毒な状態であつた。堂舎の再建にあたり、貴林の助力をえることができたなら、

翌春には着工の見込みである旨が記されている（38）。

横山家が吉祥庵にとつて唯一無二の強力なパトロンとして意識されるようになった様子を読み取ることができる。横山貴林にとつても、長隆を祀る廟所の荒廢は無視できないものだったにちがいない。享保十一年（一七二八）の「吉祥庵由緒書」には書かれることになかった横山家は、二〇年後の延享四年までには、吉祥庵が頼ることのできる間柄として両者は深い関係で結ばれるようになっていたのである。

このとき貴林が吉祥庵の再建に積極的な援助をしたのは、別の理由もある。実は、貴林による吉祥庵参詣と同寺の堂舎再建が行われた延享三、四年は、横山長知の一〇〇回忌にあたる。貴林が文武に秀でた祖先を尊崇しながらも、直系ではない子孫としての自身の立場を強く意識したとき、長知という人物は大きな存在であつただろう。長隆の一五〇回忌を機に菩提所の参詣と堂舎再建をてがけて、みずからの祖先を顕彰し、永代にわたる横山家の繁栄を祈念していたと考えられる。

貴林の死後も吉祥庵と横山家の関係は、継承されていた。

【史料四】(39)

覚

一、米 五俵

右、長隆院殿松山峯祝居士、為齋米毎歳可指進者也、

加州横山山城内

天明六

二月

上田宗右衛門

「信安」 (花押)

横山人兵衛

「好顕」 (花押)

渡部武兵衛

「友賢」 (花押)

武藤伊織

「直方」 (花押)

江州伊香郡中之郷村

吉祥庵 了道長老

【史料四】は、天明六年（一七八六）二月付けで、貴林の孫の隆従の家臣たちが発給した書状である。毎年、横山家から長隆の菩提を弔う齋米として五俵を寄付することが約束されていたことがわかる。吉祥庵には、ほぼ同文の文化一一年（一八一四）四月付「横山隆盛書状」があり、この年から一〇俵に加増されていた。貴林没後四〇年ほど下るものの、横山家から吉祥庵への齋米寄付が恒常化していたのである。

『三州奇談』によれば、横山家から戸隠神社へ毎年一〇

俵の寄付が約束されていたが、実際に寄進された形跡がない。しかし、これに酷似した寄付慣行が横山家から吉祥庵に対して行われていたのである。『三州奇談』の逸話は、吉祥庵への齋米寄付がモデルとなっていたのではないだろうか。

第三章 横山氏の先祖観念

一、横山貴林の家譜

横山貴林が家譜的性格の強い墓碑を造立した享保一八年（一七三三）は、『横山家譜』が作成された年でもある。これらは、祖先を顕彰し、家の由緒を明示し、正当化しようとする運動であった。貴林は、なぜこのとき家譜を編纂したのだろうか。現存する横山家の家譜類を比較しながら、貴林の先祖観念を読み解いてみることにしよう。

表1の通り、管見のかぎり、横山家に関する家譜は全部で一〇点現存している⁽⁴⁰⁾。このうち最も古い家譜こそが、享保一八年に横山貴林によって編纂された『横山家譜』①である。

ついで、半世紀以上のちの天明五年（一七八五）に、九代横山隆従によって『家譜』②が編纂されている。これ

には、明治年間に前田家編輯部の手によって写されたもの

作された『家譜』(④)は、一一代当主横山隆章によって作

(表1)

史料名	編纂年	編者	史料番号	所蔵場所
①横山家譜并補注	原本・享保一八年(一七三三) 補注・安永六年(一七七七)	高沢篤信編 横山大和守命	16.34.192	玉川図書館
②家譜	天明五年(一七八五)	横山大膳(隆從)	16.31.249	〃
③横山氏系図	明和二年(一七六五) 〓文化六年(一八〇九)	横山政賢編	16.31.258	〃
④家譜	文政六年(一八二三)	横山求馬(隆章)	16.31.251	〃
⑤横山氏家譜	弘化三年(一八四六)	天野憲章写	004295143	石川県立図書館
⑥横山長知伝	明治一七年(一八八四)	横山政和	16.34.192	玉川図書館
⑦横山系図	明治二三年(一八九〇)	不明	16.31.247	〃
⑧横山氏系図	明治年間	前田家編輯方手写	16.31.253	〃
⑨横山家譜	明治年間	不明	16.31.250	〃
⑩横山隆平祖先以来事蹟書	明治以降 (明治三二年の記録が最後)	不明	16.31.252	〃

(⑨)の二点が存在し、初代長隆から八代隆達までの事歴が詳細に記録されている。

一九世紀には、江戸後期から明治前半期にかけて四点もの家譜が作成されていた。まず文政六年(一八二三)に制

られたものである。横山家の始祖とされる敏達天皇からはじまる長大な系図をふくみ、長隆にはじまる近世横山家当主たちの詳細な記述が盛り込まれている。明治期に入ると、家譜や由緒書類を整理した痕跡が随所にみられる。特に、

横山政和は明治一七年（一八八四）に『横山長知伝』（⑥）を著し、家譜への加筆も行っている。

貴林の『横山家譜』とは、現在確認できる最も古い横山家の家譜・由緒書である。本書は、四六丁（うち墨付き四五丁）からなる和綴じ本で、現在は金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫に架蔵されている。

その冒頭には、「此一冊並二系図□、享保年中大和守家臣高沢五左衛門篤信ニ命シテ、旧譜ヲ考一古録ヲ集メ、其事實ヲ顕シ、吉徳公へ進呈シタル写ナリ、□家臣ノ補入シタルハ、今朱ニテ旁ニ書之」と記され、本書の制作経緯を読み取ることができる。本書は、享保年間に横山貴林が家臣である高沢篤信に命じて旧譜や古記録を集めて編纂した家譜であった。また、完成後、藩主前田吉徳に献上されたものの写しとされ、行間や余白に横山政和による加筆がみられることから、献上本を明治期になって書写したものだと思われる。

内容は、初代長隆から七代貴林までの事歴の記録である。貴林に関する記述では、それ以前の三人称語りから「私」という一人称が使用されるようになり、カタカナ表記だった文章は漢字表記に変わっている。本書は、制作者である横山貴林の私的な自伝的性格を帯びた家譜なのである。

他方、『横山家譜』は、横山家が藩主に自家の由緒を表明した公的文書でもあった。貴林が加賀藩内で重要な政治的地位を誇り、養子でありながら断絶の危機にあった横山家の血を再興した中興の祖とよぶべき人物であったことはすでに述べた。貴林の『横山家譜』は、このち後世に子孫たちによって編纂されてゆく家譜に少なからぬ影響を与え、横山家の先祖観念の形成に大きな役割を果たした可能性が高い。

そこで、貴林の編纂した『横山家譜』のうち初代長隆、二代長知の伝記をもとに、その祖先観の特質を具体的に読み解いてみることにしよう。

二、賤ヶ岳合戦の武勇と孝養

横山長隆は、天文八年（一五三九）に横山時隆の子として美濃国多藝郡宝室原庄に生まれた。長隆は、生涯のなかで三人の主君に仕え、そのたびに拠点を移している。

多藝郡直江（岐阜県大垣市）の杉弥左衛門の婿養子となつた長隆は、斎藤道三や織田信長に仕えた稲葉一鉄の家臣となる。しかし、同家の家臣を殺害したことで出奔する。越前に向かった長隆は、大野城主金森長近に仕えたのちに閑居を申し出て、剃髪して名を半喜と改めた。このとき美濃

や丹波に別れていた一族を呼び寄せたという。

長隆が、最後に仕えたのが前田家である。『横山家譜』によれば、天正一〇年（一五八二）にはじめて前田利長に拜謁したとされる。ところが、長隆の人生は、わずか一年後の賤ヶ岳の戦いで幕を閉じる。

天正一一年三月、織田信長亡き後の後継争いの末に、羽柴秀吉と柴田勝家が近江賤ヶ岳において激突した。柴田軍の先鋒を務めた前田利家・利長軍は敗走し、府中城まで逃げ帰った。このとき長隆は、敗走する柳ヶ瀬の地で殿を務めて壮絶な討死を遂げた。これを記した『北藩秘鑑』や『関屋政春古兵談』などの軍記類には、柳ヶ瀬合戦で討死した七人を記載するものが多く、その一人として長隆の名前があげられている（41）。

横山家の家譜類では、横山長隆の生涯はなぞにつつまれている。家譜に記録された長隆伝の大部分は、前田家に仕官した天正一〇年から賤ヶ岳で戦没する天正一一年までの一年間の事績で、賤ヶ岳合戦での長隆の武勇が多くを占めている。

合戦を前に、長隆は、前田利家から留守居役を命じられながらも、それを断り従軍を申し出たという。これに対して、主君である利長は、「復尊躬ニカハラザルモノヲ差置カ

レ度トノ賢慮ニ依テ、長隆ニ被命ト再三御説アリ（あなた
の代わりになる者はいないので、留守を守ってほしいと何
度も説得した）が、それでも御旗奉行の役をうけて戦場に
扈從したとされている。利長の長隆への信頼の厚さを強調
する表現となっているのである。

さらに、長隆が殿として孤軍奮闘する様子も詳細に描か
れる。【史料二】の傍線部①・②も参照しながら確認してみ
よう。

【史料五】

長隆（中略）天正一一年豊臣秀吉公柴田勝家ト江州柳ヶ
瀬ニ戦卒ス。利家公利長公御出馭アリ、府城留守長隆
ニ被命、長隆奉辞シ、従軍ヲ願ト雖、復尊躬ニカハラ
ザルモノヲ差置カレ度トノ賢慮ニ依テ長隆ニ被命ト再
三、御説アリ強テ違戻シ奉リ、御旗奉行ヲ蒙リ戦場ニ
扈從ス。此役、味方敗績ス為ニ陣頭ニ進ミテ御旗ヲ建
固ベ、卒士ヲ退ケ、敵ヲ迎ヘ鼓ベ勇不撓敵兵、猶豫ス。
利家公回軍シ給際、御旗陰ニ兵少ナキヲ察シ、敵勢来
テ、撃コト銃ナリ、長隆鎗ヲ奪テ防戦シ□（敵？）輩
ヲ格殺シ甚創ツキテ死ス。（中略）

長知（中略）天正十一年江州柳ヶ瀬ノ軍ニ、長知利長公

ノ麾下ノ曲ニ從テ陣ヲ取ル、此日味方敗責シ、衆ト共ニ殿シテ退ノ際、短兵襲來テ返リ撃コト數回、長知揮鎗テ、其曉騎ヲ突落シ斬獲ス、公親クアタリ視給テ、長知力壯勇ヲ被感ヘ特ニ長知年十有六、及ヒ此役、長隆ハ御旗ヲ司リ先驅ニ列シ、長知ハ麾下ニ属シ、父子軍ヲ一同ニシ陣ヲ東西ニ取ル、衆兵退ノ時、長知待テ^{出ル}、長隆カ僕走り來テ、父亦無難ナリ、斯ル敗軍ニ及テハ、須臾モ遲滞セサル者ナリ、長知未退ハ速ニ可去、父カ口陣トシテ素懷ヲ責テ節度ヲ演ルコト、直チニ指示カ如シ、乃イ荷担シテ退ク

殿として迫り来る敵兵をなぎ払いながら、東西に陣取つた長隆・長知父子の武勇が語られている。とりわけ弱冠一六歳の若武者である長知は、落馬しながらも槍をふるって奮迅の活躍をしたと特記されている。また長知が父長隆の撤兵を待っていると、長隆は使者を送つて先に撤退するよう促した。この父の指示が、父子の生死を分けたことになる。子は辛くも窮地を脱し、父は子が無事に戦地から離脱したのを見届けるように、槍をもつて奮闘し、敵数人を退けたのちに壮絶な討死を遂げたのである。

こうした賤ヶ岳合戦における横山長隆・長知の活躍と父

子の情愛は、忠義と孝養を重視する近世武家社会の倫理に合致し、その理想を体现した逸話だったと評価できる。それは、加賀藩横山家にとって、原点ともいえる重要な出来事のひとつに数えられたことだろう。

もとより前田家にとつて、賤ヶ岳合戦は敗戦という苦い記憶であつた。同時に、このち豊臣政権を中枢で支える大大名へと転身してゆく大きな契機でもあつた。この合戦には、当主利家、嫡男利長以下、前田家を支える多くの重臣が参戦していた。敗戦の混乱のなかで、速やかな撤兵を完遂し、その命を救つたことは、その後の前田家の命運を左右する重大事であつたはずである。

始祖長隆の事蹟は、父子の孝養の理想とともに、前田家存亡の危機を救つた活躍として貴林によつて次代へと語られたのである。

三、シンクロする大坂の陣の記憶

横山長隆の嫡男長知は、永禄一一年（一五六八）に美濃国直江莊に生まれた。七歳のときに丹波円通寺で読み書きを学び、閑居した父によばれて越前大野の岫慶寺に移り、一五歳まで学問を修めたという。

賤ヶ岳合戦における父の死により家督を相続した長知は、

新たに入部した加賀国で佐々成政との抗争に忙殺された。

加賀・能登の要衝である末森合戦や鳥越合戦など、長知の一〇代の大半は戦場で過ごすことになる。合戦のたびに戦功をあげており、主君利長からも長知の勇猛さは一目置く存在となっていた。また長知は、武勇のみならず、迅速な行動や作戦の立案といった知略にも富み、重臣たる才覚を備えていたという。天正一六年（一五八八）には、二一歳にして藩政の中樞へと足をふみいれることになる。

『横山家譜』は、長知の事蹟のうちふたつのエピソードを濃密に描いている。

ひとつは関ヶ原合戦直前のことである。慶長四年（一五九九）閏三月に五大老であった利家が死去すると、前田家は、徳川家康から謀反の嫌疑をかけられた。加賀征伐を検討する徳川家に対し、利長の命をうけた長知が、弁明の使者として江戸へ向かった⁴²。その結果、利長の母芳春院が人質として江戸に向かうことで戦火は回避された。それは、対徳川戦争を回避し、幕藩体制下で百万石という大身の外様大名として生き残る道筋をひらき、加賀藩の発展に大きく貢献したものであった。

もうひとつが大坂の陣である。慶長一十九年一月に大坂冬の陣が起きたとき、長知は山城国山科で牢浪の身となっ

ていた。五年前の慶長一四年の富山城炎上の際に首謀者とされて菩提寺の金沢松山寺に蟄居し、このころには一族とともに山科に転居していたからである。

『横山家譜』は、大坂の陣が勃発する直前の様子を以下のように記している。「長知が加賀国を離れたとき、豊臣秀頼が將軍家に対して蜂起し、全国の武将から兵を集めていた。家康は、何度も長知を味方に誘い、秀頼もまた別の領地を条件に招致しようとした。しかし長知は、加賀藩に属しないことを嘆き、その誘いには応じなかった」。このうち、前田家の参戦を知った長知は、大坂に参陣して帰参を願い出た。その忠誠心に感心した藩主利常は、長知の帰参を許した。利常は、帰参したばかりの長知に厚い信任をよせ、不在となる金沢の内政を一任した。寛永三年（一六二六）には「山城守」を叙爵され、その二年後には加増により三万石の所領をえて、加賀八家横山家の強固な地盤を築き上げた。

長知の事蹟は、長隆伝と同様に、前田家の危機に際して重要な役割を果たしたことが記されているものの、武功ではなく外交、内政をふくめた政治手腕を称えるものであった。

大坂の陣は、藩政黎明期の加賀藩前田家にとってはじめ

て総動員体制でのぞんだ大戦であった。しかも、新政権たる徳川幕府軍の一翼を担い、豊臣方の軍勢と激戦をくり広げた末に勝利した合戦であった。近世に入って加賀藩士たちが作成した由緒書には、大坂の陣での先祖の武功がこぞって書き記されることになる⁽⁴³⁾。

横山家にとって、長隆と長知の二人は特別な存在であった。奥村支家から末期養子として横山家当主となった貴林は、横山家の歴史を後世に残す「語り部」としての役割を担っていたといえるだろう。貴林は、横山家の始祖長隆の武勇と孝養を喧伝し、その気風が脈々と子々孫々にまで受け継がれていくことを願っていたにちがいない。その願いは、一五〇回忌を期して造立された近江吉祥庵の墓碑に託されたのである。

加えて、武勇だけでなく政治で華々しい足跡を残した長知の活躍は、貴林にしてみれば自身のこれまで歩んできた履歴とシンクロしていたにちがいない。

慶長一九年十一月の大坂冬の陣は、長知にとっては念願の加賀前田家への帰参がかない、金沢城代として再スタートをきった人生の岐路ともいえる戦争であった。また同年の五月二〇日、長知を召し抱えた利長が五三歳で死去している。三〇年以上にもわたって仕え、深い絆で結ばれて

いた利長の死は、長知に大きな喪失感を与えたにちがいない。このとき、長知は四七歳であった。

新藩主宗辰の家督相続により、貴林が江戸へ参府したのは、延享二年（一七四五）のことであった。この年、五六歳で死去した前藩主吉徳と、横山貴林、そして本多政昌は、二二年におよぶ藩政とともに歩んだ関係であった。このとき貴林は五一歳であった。

金沢城代という役職や江戸幕府との外交交渉といった政治実績、さらに自身を重用していた五歳ほど年長の主君の死は、貴林が長知の足跡をなぞり書きしたかのようにシンクロしているのである。そうした貴林の思いが、長知の一〇〇回忌を期して、長隆が眠り、若き日の長知が危地を脱した湖北賤ヶ岳の地への墓参を思い立たせたのかもしれない。

その後の貴林は、息つく暇もなく内政に多忙をきわめた。延享三年一二月、就任から一年半にして新藩主宗辰が二二歳の若さで死去し、その死はしばらく秘せられた。ついで延享五年には、藩主毒殺未遂事件にはじまる加賀騒動が勃発する。騒動のさなかの寛延と改まった三月、貴林は五三歳の生涯を終えた。その死まで家督を息子に譲った形跡はなく、近江吉祥庵の再建を見届けたかも定かではない。

四、書き継がれる家譜

その後には作られた六名の横山家の家譜を見比べてみると、記述に少なからぬ変化が確認できる。貴林死後の横山家の子孫たちは、どのような先祖観をいだいていたのだろうか。ひとつは、横山家の系譜意識のなかで、二代長知の重要度が増している点である。

家譜類のなかの長隆伝は、①では八一三字であった長隆伝が、②では一九〇字、④では一九三字としだいに減少する傾向にある。柳ヶ瀬合戦における武勇を叙述した『横山家譜』に対して、子孫の家譜では史実の羅列に留まる画一的な表現が多く、記述も短くなっている。また武勇に優れた英雄イメージがきわだつ①の長隆伝には、作者である貴林の憧憬がみてとれるが、②以降の家譜では、長隆が特別な存在という印象は受けない。

他方、横山家歴代当主のなかで最も多くの字数が費やされているのは長知伝である。これは、『横山家譜』をふくむすべての家譜に共通する特徴である⁽⁴⁴⁾。

長隆伝が減少し、長知伝が記述を維持し続けたすれば、貴林以降の横山家の子孫たちにとっては、長隆よりも長知の方が相対的に存在感が増していたと評価できるだろう。

(45)

享保一八年（一七三三）の長隆一五〇回忌に吉祥庵墓碑を建立した貴林は、延享三年（一七四四）の長知一〇〇回忌には吉祥庵参詣と堂舎再建を企図していた。先述したように、晩年の貴林は、みずからの生涯を長隆よりも長知に重ね合わせていたとみられる。横山家の祖先観念の変容は、貴林の祖先観の変容に由来するものかもしれない。

もうひとつは、貴林に関する記述は、貴林以後の家譜では、その他の当主に関する記述よりも比較的多くの分量を割かれている点である。横山長隆の直系は、六代任風で一度断絶した。その養子として当主となった貴林の血は、それ以降絶えることなく横山家に引き継がれてゆくことになる。貴林が編纂した『横山家譜』には、貴林自身の記述は淡々と記されるに留まっていた。他方、後世の子孫たちにとって、貴林は、みずからの系譜を語る上で不可欠な重要な人物と位置づけられたとしても不思議ではないだろう。

貴林のなかで長知の功績はしだいに評価を上げ、長知の重要度はその後の家譜のなかで増大していった。また貴林以降の家譜編纂を通して、中興の祖としての貴林の存在が語り継がれるようになる。こうして横山家では、二代長知と並んで、七代貴林が重要な先祖として位置づけられたと

考えられる。

また、いち早く貴林の姿を描いた物語が、堀麦水の著した『三州奇談』である。麦水の生まれた享保三年から貴林の没年である寛延元年（一七四八）までの期間、二人は活躍期を同じくしている。麦水と貴林の接点は、未だ不明なままであるが、物心ついたときから、麦水が本格的に文芸の世界に身を投じる延享四年まで、藩政において活躍していた貴林に理想の姿を投影する思いが、『三州奇談』における貴林の礼賛へとうつしだされたのかもしれない。

おわりに

『三州奇談』で語られた延享三年（一七四四）の加賀藩八家横山家の当主貴林による戸隠山参詣とは、同年に江戸から帰国する貴林の近江吉祥庵への寄り道をモデルとするものであった。

近江吉祥庵は、横山家の武勇と忠孝の根拠となる賤ヶ岳合戦の主戦場からほど近い。享保一八年（一七三三）は、賤ヶ岳で戦没した初代長隆の没後一五〇年目にあたり、貴林は吉祥庵に墓碑を建立していた。

また、墓碑造立と時期を同じくして、横山家では貴林主

導による家譜編纂が行われ、後世に横山家の由緒と歴史を伝える試みははじまっていた。そこでは、関ヶ原合戦や大坂の陣において外交・内政両面にわたって政治手腕をふるった二代長知の功績が、貴林自身の履歴と重ね合わされながら顕彰されていた。貴林が吉祥庵に参詣した延享三年は、この横山長知の一〇〇回忌にあたっていたのである。

奥村支家から末期養子として横山家当主となった貴林は、家譜編纂や廟所である吉祥庵への助縁を通して、先祖を称揚し、横山家の八家としての家格の正当性を主張する必要があった。さらに、貴林死後に編纂された家譜では、長隆を初代としながらも、二代長知の事蹟に重点をおく構成が定型化するとともに、七代貴林も中興の祖として重要視されてゆく。こうして加賀藩政と横山家に大きな足跡を残した貴林の功績は、『三州奇談』の逸話として巷間に語り継がれていったのではないだろうか。

注

（１）藩研究は、岡山藩研究会、尾張藩社会研究会、加賀藩ネットワーク、対馬宗家文書調査研究など、比較的まとまって史料が残存している藩で個別の研究会が組織され、膨大な史料

の整理が進み、多様な研究テーマをもつ各論が展開しつつある。岡山藩研究会編『藩社会と近世社会』（岩田書院 二〇一〇年）、渡辺英夫編『秋田の近世近代』（高志書院 二〇一五年）、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』六（清文堂出版 二〇一五年）。

- (2) 近世の「家」に関する研究は、高野信治『大名の相貌 時代性とイメージ化』（清文堂出版 二〇一四年）のほか、田原昇『近世大名における養子相続と幕藩体制』（『史学』六七（二）一九九八年）、磯田道史『近世大名家臣団の相続と階層』（『地方史研究』二八八号 二〇〇〇年）などがある。最近のものでも、清水翔太郎『嫡孫承祖と人生儀礼』（『国史談話会雑誌』五二 二〇一二年）、斎藤夏来『近世大名池田家の始祖認識と画像』（『歴史学研究』八九二二〇一二年）林匡『島津家由緒と薩摩藩記録所』（『黎明館調査研究報告』二〇一三年）、千葉拓真『近世大名家の養子相続に関する一考察』（『近世社会史学論叢』東京大学日本史学研究室紀要別冊 二〇一三年）、平野仁也『寛政重修諸家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢』（『日本歴史』八〇三 二〇一五年）、平野仁也『十八世紀における家史編纂』（『地方史研究』三七七 二〇一五年）など数多い。
- (3) 加賀藩研究ネットワーク編『加賀藩武家社会と学問・情報』（岩田書院 二〇一五年）。

- (4) 石野友康『織豊期加賀前田氏の領国支配体制』（『加能史料研究』八一 一九九六年）、林亮太『加賀藩上級家臣団の職掌と職名の変化について』（『地方史研究』三六二 二〇一三年）、岡嶋大峰『戦場における大名前田家の統制と加賀藩士の自律性 大坂の陣を事例として』（『加賀藩研究』二二〇一二年）、本多俊彦『本多政重家臣団の基礎的考察』（『高岡法科大学紀要』二〇 二〇〇九年）など

- (5) 久留島浩『村が『由緒』を語るとき』（久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社 一九九五年）、落合延孝『猫絵の殿様』（吉川弘文館 一九九六年）、井上攻『由緒書と近世の村社会』（大河出版 二〇〇三年）、山本英二『村の由緒、イエの由緒』（『日本歴史』六七三 二〇〇四年）、大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』（吉川弘文館 一九九九年）、歴史学研究会編『由緒の比較史』（青木書店 二〇一〇年）、岩瀬清美『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版 二〇一〇年）。

- (6) 羽賀祥二『史蹟論』（名古屋大学出版会 一九九八年）、岸本寛『大名家祖先の神格化をめぐる一考察』（佐々木克編『明治維新期の政治文化』思文閣出版 二〇〇五年）。

- (7) 加賀藩横山家の研究は、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室編『金沢城代と横山家文書の研究』（石川県

教育委員会（二〇〇七年）によるところが大きい。横山家に関する文書や絵画の史料目録が明らかにされ、二代目当主横山長知を中心とした論考が数多く収録され、横山家の職制や藩政初期の様相が明らかになってきた。

- (8) 活字として表れにくい先祖観や家中意識に言及したほぼ唯一の論考に、林亮太氏の「加賀藩年寄奥村宗家の養子からみる家関係と家意識」『加賀藩研究』四（二〇一四年）がある。林氏は、加能越文庫に残る家譜や記録をもとに、奥村宗家と奥村支家の関係性や意識にアプローチしている。

- (9) 堀麦水著・堤邦彦校訂『三州奇談』（堤邦彦・杉本好伸『近世民間異聞怪談集成』国書刊行会 二〇〇三年 二五六頁）。

- (10) 戸隠神社は、長野県上水内郡戸隠村にある神社。奥社・中社・宝光社・九頭竜社・火之御子社の五社からなる。祭神は天手力男命・九頭龍神・天八意思兼命・天表春命・天鈿女命。『三州奇談』では、九頭竜社と天手力男命だけをとりあげている。なぜふたつの神格だけなのかについては、今後の課題としたい。

- (11) 『先祖由緒井一類附帳 平手太郎』（金沢市立玉川図書館近世史料館加能越文庫 請求番号 一六・三一・六五）。

- (12) 小川恭一「近世武家の通称官名の制約」『風俗』三〇巻四（一九九二年）。官途名のみを材料に、特定の人物にたどりつく

ことは難しい。しかし、活躍期や地域を限定することで、人物を特定することができるようになる。また、將軍の在所名である武蔵守や、伊達家のみが使用していた陸奥守など、官途名が世襲されていた事例もあるようだ。

- (13) これは横山家に限らず、同じ八家の本多家では、代々「安房守」が受け継がれている。このように家によって固有の官途名を護り続けることも少なくない。実際、「山城守」を代々名乗る全国でも数少ない家柄として、横山家は稀有な存在だといえる。

- (14) 林亮太「人持組頭の成立過程に関する一考察」『加賀藩研究を切り拓く―長山直治追悼論集』桂書房 二〇一六年）において、人持組頭の本来の職務内容は、軍事的な場における統括役とされる。しかし、時代を経る過程で、組中に対して警戒を出すことや、組士の婚姻や養子願に関わるような職務に変化した。また、前田綱紀による貞享三年（一六八六）の職制改革によって、大老や人持組頭に就任する者は、年寄身分の家臣に限定され、次第に組方のみならず役方の職務も請け負うようになったとしている。

- (15) 石野友康「金沢城代とその職務」『金沢城代と横山家文書の研究』石川県教育委員会 二〇〇七年。横山家当主で金沢城代を務めたのは、二代長知、七代貴林、一代隆章、一三

代隆平の四名のみである。

- (16) 前田吉徳治政下において、横山貴林と本多政昌は、享保一五年（一七三〇）十二月二十九日に同時に「当分御城方」に任命されている。

- (17) 前掲注（15）石野論文によると、金沢城代の位置づけは、近世初期と中期以降では異なるという。軍事防衛という意味合いが次第に薄れ、中期以降は名誉職となったとされる。その背景としては、藩内の組織として官僚制の整備が進んだことがあげられている。

- (18) 貴林の娘は、富田蔵人修和（二五〇〇石）や中川八郎右衛門長裕（五〇〇〇石）、本多安房守政行（本多家六代当主・五万石）などに嫁いでいる。

- (19) 「袖裏雜記」『加賀藩史料』七 清文堂出版 一九八〇年 延享二年七月六日条 初出…前田家編輯部 一九三四年 以下同。

- (20) 「政隣記」『加賀藩史料』七 清文堂出版 一九八〇年 延享二年十一月一三日条。

- (21) 千葉拓真「加賀藩前田家における公家との交際」『論集きんせい』三三・二二〇一〇年。

- (22) 横山求馬『家譜』（金沢市立玉川図書館近世史料館加能越文庫 特一六・三一・二五一）。

- (23) 忠田敏男『参勤交代道中記：加賀藩史料を読む』（平凡社 一九九三年）によれば、全一九〇回の参勤交代のうち、一八一回が北国下街道を使用したとしている。

- (24) なぜ吉祥院への参詣が、戸隠山参詣に置き換えられたのかは、依然として不明である。また、現在横山家と戸隠神社のつながりを感じさせる史料は発見できていない。

- (25) 二〇一五年九月二十九日に吉祥院にて、大塚のほか、黒田智氏、吉岡由哲氏、鳥谷武史氏とともに調査・史料撮影を行った。吉祥院の現住持竹内実弾様には、調査に多大なる協力をいただいた。また史料読解の上で、金沢市立玉川図書館近世史料館の職員のみなさまに大変お世話になった。ここに記して感謝したい。

- (26) 後述の墓碑が初見である。また史料典拠『家譜』（一八二三）『横山系図』（二八九〇）にもみえるが、一九世紀に下るものと思われる。

- (27) 藩主や、他の八家も代々埋葬されており、野田山墓地に埋葬されることが慣習化していたことがうかがえる。

- (28) 「享保一二年（一七二六）吉祥庵由緒書」『吉祥院文書』前掲注（25）調査時に採訪した。

- (29) 横山長隆の墓碑は、鞘堂のなかで雨風に当たらないように保管されている。そのためか、墓碑自体の保存状態もよく、

碑文の剥落等のダメージもほとんどみられなかった。

(30) 「吉祥院横山長隆墓碑文」。郷土史教室『中之郷 長谷山吉祥院』一九八七年により校正した。

(31) 大坂の陣は、加賀藩士たちにとってきわめて重要な合戦だった。みずからの始祖たちの軍功が加賀藩の繁栄に寄与したことを強調する由緒書が数多く作成されたと推測される。

(32) 前掲注(5) 久留島浩論文、山本英二・井上攻著書参照。

(33) ただし、長知は、武功のみならず、藩政においても手腕を遺憾なく発揮した人物であった。加賀八家としての横山家を確固たるものにした最大の功労者であるにもかかわらず、山城守の叙爵などの政治面の功績について言及されていないことに違和感を覚える。

(34) 横山長知の次男興知は、慶長五(一六〇〇)年に証人として江戸に送られた縁で、秀忠直参の旗人になっている。木越隆三氏は、「横山長知と藩年寄衆の成立」『金沢城代と横山家文書の研究』石川県教育委員会 二〇〇七年)において、旗本横山家のもつ情報網は、加賀藩横山家が幕府との交渉を行う上で大きな役割を果たしただろうと評価している。

(35) 坪内玲子「加賀前田藩藩士における家系継承」『龍谷紀要』第一八巻第二号 一九九七年)において、家督継承において養子・女性が果たす役割が、他の藩に比べて顕著であること

が指摘されている。

(36) 全文は以下の通り。「為新春之嘉儀家来方迄、去廿日之芳札令拝誦候、弥依無異御加年珍重之事情、拙者儀願来(怡力)増悦之至在候、猶都永々之時候、恐々不宣、／横山大和守／正月廿二日 (後筆) 「貴林」(花押)／吉祥庵□□」

(37) 「吉祥庵徹音願書」『吉祥院文書』前掲注(25) 調査時に採訪した。

(38) 史料三によれば、堂社再建は、吉祥庵からの提案によって企画されたものだと考えられる。しかし、横山家の主導のもとに再建が計画された可能性も未だ捨てきれない。

(39) 「天明六年横山山城守書状」『吉祥院文書』前掲注(25) 調査時に採訪した。

(40) この数は、金沢市立玉川図書館近世史料館と石川県立図書館所蔵のものに限られる。横山隆昭氏所蔵の家譜・系図等は未見である。

(41) いずれも『加賀藩史料』第一編 四月二二日条(清文堂出版 一九八〇年)に収録。

(42) 加賀征伐の危機における長知の動向は、不明な部分も多く、諸説存在する。長知単独での交渉ではなく、高山南坊や太田但馬ら五名の使者が家康のもとへ送られたとする説や、三度にわたって交渉が行われたとする説などがある。前掲注(34)

の木越論文では、長知が単独で家康を説得したとするのには無理があるとし、重臣の数名が数回にわたり交渉し、慶長五年の春に妥協できたとみる記録の方が現実的であると結論づけている。

(43) 前掲注(4)の岡嶋論文では、大坂の陣を契機として、「公儀軍役」に即応できる統一的な家臣団もつ加賀藩が成立したとしている。また、加賀藩士たちが大坂の陣後に提出した戦功書上の宛先の多くは、山崎閑斎・横山長知・本多政重・松平康定の四名に宛てたものであり、戦功を吟味する立場にあったことを指摘している。

(44) ①の家譜では、全体の五八パーセントの分量を占めている。また、②では三八パーセント、④では三一パーセントと、すべての家譜で一番多く記述されるのは長知伝である。

(45) ただし、『横山家譜』以来の長隆を初代当主する位置づけは継承されており、二代長知を初代とする系譜認識はみられない。